

## 鎌倉の大仏さま

大塚 喜子

長谷駅で、鎌倉の大仏さままで連れて行ってくれるタクシーを探して、出会ったのがこの運転手だった。ほかにも数人と話したが、単身の全盲の女に付き合ってくれる運転手はいなかった。

タクシーを降りて外へ出ると風が唸りながら向かってきて私を包んだ。木々が擦れる乾いた音も風と一緒にになって纏わりついて離れない。

私は大仏さまにお目にかかりに来た。夫の手を借りずに、藤沢の自宅から、電車とタクシーを乗り継いで二時間ほど掛ったが、一人でここに来ることが出来た。

運転手が近づいてくる気配に安堵して、話しかけた。

「真向かいに…大仏さまがいらっしやるのね…」

「そうですよ。ここは高徳院の駐車場です」

「人の気配が少ないようだよ」

「今日はこんなもんでしょう。コロナ禍で近隣の小中学校は休校していますし、他府県からの修学旅行生もいませんからね」私は頷きながら、辺りのどんな音も聞き逃すまいとした。

視力を失って以降、周囲の音を聞き分けるのは、自分を守る大事な手段である。右手に持った白杖で、地面のコンクリートを二度叩いて、身辺五メートル以内に何も無いのを、運転手以外は誰もいないのを確認した。ポケットの中で携帯電話が鳴った。鳴り止むのを待って、そつと電源を切った。

「さあ！行きましょう。宜しく願いしますね」

「電話に出ないんですか？」

「夫からなのよ…三時間毎に電話をくれるのよ。安心して思うわ」

「どうやって案内しましょう？手を引きますか？」

「話をしながら私の前を歩いて下さい」

運転手が前を歩き、私は彼の足音について歩いた。

「オイひろ子…気分でも悪いのか…出掛けるよ」午前七時三十分、夫が役所へ

出勤する時間である。とうに目は覚めているのに、眠りから抜け出せない。眼前に闇が覆いかぶさっている。夫の声も、自分のこの意識も、ガラス越しの風の気配も、何もかもが現実なのに、私の視界は闇で、刺激に満ちた鬼火のような明かりが小さく揺れている。瞳を開こうとするが、瞼が動かない。何も見えないことよりも、闇から抜け出せない事が恐ろしい。

「オイ、どこを見ている！大丈夫か。視線が合っていない」と言われて、恐る恐る、指先を顔に近づけた。と経験した事がない痛烈な、痛みが顔面と脳天を突き抜けた。

私の指先が触れたのは瞼ではなく眼球そのものだった。瞳が完全に開き、眼球が空気にさらされている。なのに視界は閉じたままだ。状況を呑み込み始めた私は、悲鳴をあげながら立ち上がった。振り回した右手が、ベッドの横のブック・スタンドの角に当たった。足の甲にポタポタ落ちる生ぬるい液体が、手の甲から流れる血だと気づいて、全身の震えが止まらなかった。夫が階段を駆け下りて救急車を呼んだ

長い時間をかけての検査を終えると、医師は『網膜動脈閉塞症』と病名を告げながら

「せめて二十四時間前に診察していれば、失明は避けられたのですが」と言った。傍らで看護師が

「手の甲の傷は深くはなさそうですが、消毒はしっかりしてください」と付け加えた。

今、起こっている事の全ては夢で、数時間後には目覚めるに違いないと思わずにはいられなかった。県内にある国立の視覚障害者リハビリセンターに関する分厚い書類と、介護認定を受ける為の案内書を手渡された。

私は何も見えないのに、これ等を渡されたことに苛立ち、夫は治療を放棄した医師に苛立った。

私達は『網膜動脈閉塞症』と病名を反芻しながら（大丈夫、治らない病気になるてない）と互いに言い聞かせた。

八方に手を尽くして「検査入院」という名目で二か所の大学付属病院で専門医の診察を仰いだが、診断は何ら変わらなかった。

夫婦で参加した「視覚障害者自立生活訓練」の合宿で、歯の磨き方や洗顔といった基礎的な技術を教えられたが、何より屈辱なのは、三歳児の生活技術の習得すら難しいという現実だった。

夫は心強く振舞っていたが、私から少し離れると声が嘎れる時もあった。合わせて四百時間の訓練を終えると、単身の外出許可が出た。なのに私は家の中で一度椅子に座ると、用事がない限り動かなかった。

「外へ行こう。気分転換になるよ」

「気分転換なら、お一人でどうぞ。外も内も闇であることに変わらないワ。窓を開けるだけで、気分転換になるワ、それで充分よ」といつて、夫の誘いに素直になれなかった。しかし、夫は言葉を変えて、常に私を外へ連れ出そうとした。

朝起きるとラジオに電源を入れ、寝るまで音を流し続けた。音楽やアナウンサーの声は関係ない。ラジオが流れている間が現実で、切れれば闇だった。

役所に妻の障害の事情を説明して、半年間の休暇を願い出ていたが、その半年が終わろうとしている。

中央省庁の行政官の夫を、三十年余支えてきた妻としての自負が、夫の手を借りながら、障害者として暮らさねばならない覚悟に否応なく変わり始めている。

何時もの椅子で目を瞑って座っていた私はラジオを消し、手を伸ばして窓を開けた。何と風が心地いい。夫は復職の打ち合わせで役所へ出かけている。

ユラユラと玄関まで行き、傘立てにある白杖と、下駄箱の奥の自分の靴を確かめた。玄関の鍵を探すことなど始めから諦めた。

外へ出ると。何とも言えない解放された気持ちになって「ワア」と思わず声を発した。公園にブランコがあったのを思い出した。ブランコに揺られるのも悪くない。そう思うだけで力が湧いてくる。公園は自宅から歩いて五分ほどの距離だから、リハビリで散歩するには丁度いい。単独歩行は自立生活訓練で何度も、何度も経験済みだ。帰宅した夫に報告すれば、喜んでくれるに違いない。復職する夫に安心して貰いたい。

一步を踏み出した途端、横で甲高い自転車のブレーキ音がした。「危ねえ！」男の低い声がそう言って舌打ちした。自転車が去っていく音が聞えなくなるまで待った。

辺りに音がないのを確認すると、気を取り直して、恐る恐る白杖を振りながら歩き出した。電信柱や壁に触れながら曲がり角の数を数えた。

もうすぐ辿り着く筈なのに、一向に辿り着けない。公園はこんなに遠かっただろうか？既に二十分は歩いている。戻ろうにも、どう戻っていいのか判らない。戻れない。例え自宅前まで戻れたとしても、そこが自宅かどうかは、家の中に入らなければ分からない。門柱や玄関ドアに、触って判る目印を付けておくようにと、教えられていたのを思い出した。一人で外出するなどは諦めていたのは間違いだった。

兎も角帰ろう…そう決めて、来た道を戻り始めたが、行きつ、戻りつを繰り返すばかりだ。尋ねようにも人の往来がない。暫く佇んでいると、前から人が歩いてくる気配がする。ホツとして、教えられているように、右手の白杖を顎の高さに上げて、頭を下げた。警戒心を与えないように相手とのスペースを空けたが相手は「すいません」と言っただけで足早に立ち去った。誰もが盲人に関わりたくないのだろう。

家を出てから三時間が過ぎ、呆然としていっていると、遙か後方から、こちらに向かって駆け寄ってくる確かな足音が聞えた。それが夫の足音だと分かると、張り詰めていた全身の力が抜けた。

「ひろ子！」

「ごめんなさい」

「帰ろうか？」夫は私の手を取って歩きだした。自宅まで十五分ほどで着いた。

夫は私を椅子に座らせると「温かいものを飲もう。何がいい？」と言い、コーヒーを飲みたいという私に、指を鳴らして、膝を叩いてから、台所に入っていった。夫の声は少しだけ震えているようでもあったが、心底優しい声だった。暫くして届いたコーヒーは少し冷めていたが、美味しかった。

「来週から出勤するヨ」と手短かに話してくれたが、内定していた大臣官房への人事があるのか、ないのか肝要な事は何も言わなかった。

「ここは新緑の今頃が一番ですね」

タクシーの運転手が立ち止まって言った。声の聞こえ方から、運転手が振り向いたのは判ったが、彼が見ているであろう新緑が私に見えるはずもなかった。それに気づいた運転手が溜息をついて

「悪意はないので、勘弁してください」

「いいのよ。気にしないで」

私は大仏さまの背の新緑に向けて大きく息を吸った。運転手は進むでもなく

話すわけでもなく立ち止まったままだ。

「近くに自販機はあるの？」

「ええありますよ」

「何か温かいものを買ってくれませんか」

バッグの中から小銭入れを取り出して数えた。それは生活訓練として何度も練習したことの一つだった。小銭の質感、大きさ、穴の特徴。一万円札、五千円札、千円札それぞれの質感、今では随分と早く数えることができて、こうして晴眼者の前ではやはり、抵抗がある。

「あなたの分も買ってください」私は小銭入れを手渡した。

運転手は其れを受け取ると、小走りで来た道に戻っていった。足音が遠ざかり、そして聞こえなくなった。

三分待ったが運転手は帰ってこなかった。空間に立っているのが不安になり、白杖を振って壁か柱を探した。杖の先に硬い金属が当たり、手を伸ばして歩み寄って、耳を澄まして、手で撫でると、なんとそれは自販機だった。呆然として、運転手が走り去った方向に顔を向けた。運転手が戻ってくるか、こないか、風の音では判断できない。右手で腕時計に触れて時間を確認した。十分だけ待ってみよう。運転手が逃げたのなら、其れはそれである。然し彼が戻ってきたときに無用な事を言ったり、無様な姿は見せまい。こんな時に自分の視線がどの方向に向いているのか判らないのはつらい。顎を引いて、心を落ち着かせるために再び深く呼吸した。

腕時計の長針が六分経たことを知らせると、運転手が走り去ったときの音を逆再生させて戻ってきた。ポケットの中で握りしめていた手の力が抜けた。

「スイマセン。待たせてしまいましたね」運転手はそう言って私の右手に財布を握らせた。それを私がバッグに仕舞うのを見届けてから、紅茶の缶を差し出した。

「暖かい飲み物売っている自販機が見つからなくて。結局駐車場まで戻ってしまいました」と彼は軽く息を弾ませながら言った。

「あなたと同じホットミルクコーヒーです。ごちそうさまです。スイマセン！行く前に言えばよかったですね。あそこにベンチがあります。正面に大仏さんが見えますよ。休みましようか？」

運転手が腕をとってベンチに連れてくれた。こうして歩くのが一番楽なのが、介護の専門職か家族でないかと遠慮があつて頼めない。彼が事もなく腕を貸してくれたことに、見知らぬ場所に七分間おいてきぼりにされた事を差し引い

でも、私は軽く感動した。プルタブを開ける音がして、続けて彼の喉元が鳴った。

「盲の一人旅は運転手さんに手間をかけるわね」

運転手は私の気恥しさを払うように明るく

「どうして鎌倉にいらっしたんですか？…何故、ご主人と一緒に来られなかったのですか？」

「一人で鎌倉まで来ることには意義があるのヨ」

「挑戦みたいなもんですか？」

挑戦と言う言葉に不意を突かれて返事に戸惑った。挑戦と言えば挑戦かも知れないが。だとしたら、私は何に挑戦しているのだろうか。

運転手の質問をはぐらかしたくて

「鎌倉には長くお住まいなの？」

「三年前まで東京でタクシーの運転手をしていました。車の運転が好きなんです。毎日近道を探す事ばかり気にしていました。少しでも早くお客さんを目的地に届けるだけが目的でした。元来急かされる事が嫌いだったので東京でのタクシーの運転手に嫌気がさしたんです。ハイヤーの運転手もやってみましたが馴染めなくて鎌倉に来ました。外国の人が大勢来てくれるから、英会話を勉強したり、湘南一帯の歴史も勉強しています。収入は三割減ですが、出雲生まれの妻が、湘南の気候を気に入って、喜んでくれてるのが嬉しいです」

「お幸せなご夫婦なのね…」運転手に向かって言ったつもりだったが答えはなかった。多分に私の事を気遣っているのだろうと思った。

「今日はありがとう。鎌倉まで来れてよかったわ…」

改札口まで送ってくれた運転手に礼を言い、料金を支払って別れた。ホームのベンチに腰掛けて、携帯電話に電源をいれ、勤務中の夫に

「今から帰ります。大仏さまはとても柔和で美男でいらしたわ」と伝言を残した。

早く夫に会いたかった。

完